
例え、君が幽霊でも

美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例え、君が幽霊でも

【Nコード】

N3196W

【作者名】

美織

【あらすじ】

俺、遥は幼馴染の樹の“ユーレイ”に付きまとわれていた！
どうやったら成仏させられるのか、彼の存在を隠しながら彼の『無念』を探すことにしたのだが、当の本人には成仏する気は全くないらしく……

はじまり。(前書き)

人生初の投稿作品です！ 読み苦しいところがあると思いますが、
そこは目を瞑ってください(汗

はじまり。

「で、お前は一体いつまでここにいるつもりだ？」

俺の問いかけに答えたのは、目の前にふわふわと浮かんでいる彼。

「さあ」

俺、遠藤遥えんどうはるかは一つため息をつく、へらへらと笑う彼を睨みつけた。

「さあ、ってお前、ユーレイに付きまとわれる俺の身にもなってみろよ」

「そんなこと言われても、僕だってどうしてこうなったのか分からないし」

少し困ったように顔をしかめた彼はふわふわと俺に近づくと、至近距離で俺の顔を覗き込んだ。

「僕のこと見えてるの、遥ちゃんだけだと思っし、一緒にいちゃダメかな？」

「嫌だ。俺が嫌。大体俺をちゃん付けで呼ぶなど何度も言ったはずだが」

押し返そうとしても触ることができないのは分かっているのに、黙って身を引く。

「なんでこうなっちゃったのかな……」

俺はつい6時間前の事件を思い出していた。

*

「見てみて、遙ちゃん。空がこんなに近いよ」

「そりゃあ、ここは屋上だからな。近いに決まってるだろ」

春の暖かい日差しを浴びながら、屋上に寝転がった俺と彼、井上樹は雑談を楽しんでいた。俺は中学校二年生で樹は三年生。受験生といってもまだ四月だからそんなに慌ただしくはない。現に今ものんびりと日向ぼっこを楽しんでいる。

「ねえ、遙ちゃん」

「何だ」

「空に手、届くかな」

「は？」

ふと樹が寝ころんだまま空に手を伸ばした。手を大きく開いて、まるで何かを掴もうとするかのように。しかし空に手が届くはずもなく、樹はゆっくりと手を下した。

「後もうちょっとで届きそうなんだよな」

そういうと樹は立ち上がって、屋上の端のほうへと歩いていく。俺はなんだか嫌な予感がして、樹の後を追いかけた。

「もうちょっと高ければっ」

屋上の端には転落防止のため高さ2mくらいのフェンスがある。

樹はそれに手をかけると、その上にひらりとまたがった。

「ちょっと樹！ 危ないから降りろよ！」

「平気へーき」

その言葉通り、樹は危なげなく背筋を伸ばし、精一杯右手を空に伸ばした。

「んー、後もうちょっと……、あ」

ぐらりと樹の姿勢が傾いた。しかも外側に。

「樹！」

俺が伸ばした手はフェンスに邪魔されて届かない。

「大丈夫。僕は平気だよ」

落ちて行く途中でもにっこり笑う樹。

「大丈夫じゃないだろ」

俺がつぶやいた言葉は彼に届いたのだろうか。

はじまり。
(後書き)

書いてみて思ったのですが、創作って難しいですね……。のんびり続きを書いていきたいと思います。

ゆーれい。(前書き)

今回からちよつとずつコメディ要素が入ってきます。入ってますよね！？感想等がもらえれば励みになるのでよろしくお願いします。

ゆーれい。

俺は慌てて樹の後を追った。もちろん階段で。一段とぼしで駆け下りると、3分で下に着いた。外に飛び出してあたりを見回す。即座に倒れている樹を発見。

「樹！」

自分でも普段はなかなか出ない切羽詰まった声が出ていることが分かった。昇降口から樹のところまではざっと100mというところだろうか。俺はスタートダッシュのため後ろの足に力を入れた。

「何？」

「—————！？」

今、聞いてはならないものを聞いたような気がした。100m先に倒れているはずの樹の声で、樹のように樹が言うはずの言葉を、後ろから。恐る恐る振り返る。

「—————！？」

本日言葉にならない悲鳴2回目。真後ろにふわふわと浮かび、にっこりほほ笑んでいる樹がいた。

「もー、また女の子らしくない顔で驚かないの。そんなに僕は変かな」

「へ、変も何も、お前あそこに倒れてるはずじゃ……」

樹がちらりと俺が指さすほうに目をやった。表情は特に変わらず。また俺のほうを見ると、少し咎めるような顔つきになった。

「あのね、遙ちゃん。君女の子なんだからさ、もうちょっと可愛らしく驚けないの？」

「突っ込むところこ！？ ……俺は別に女らしくなりたいわけじゃねーし、いいんだよ。つかユーレイみたいなお前に言われたくない」

ユーレイ樹はやれやれとでも言うように首を横に振った。なんで俺はユーレイにまで女らしさを心配されなきゃいけないんだ。俺も小さい頃はもうちょっと女の子らしくて可愛かったらしい（樹談）が、物心ついた時には俺はもうこんな感じだった。何が原因なのかも分からないし、別に自分のことを俺と呼んだからといって女の子の友達がいなくてもいいので、特に気にしたこともなかった。

「まさか、お前俺が女の子らしくしないのが未練でユーレイになっちまったとかじゃねーよな」

「さあね。僕も何でこうなったのか分かんないし……」

樹がそこまで言ったところで誰かが近づいてきた。よく見ると俺の隣のクラスの担任だった。

「遠藤さん、あれは一体どうしたんだ。あれは確か3年の井上君だよな。確か君と幼馴染の」

「はい。屋上で日向ぼっこしてたらあいつ（馬鹿だから）落ちたんです」

（遙ちゃん、今絶対バカって入れたよね！？）

なぜかちょっと落ち込んでる樹は先生には見えていないらしい。彼が見えているのは俺だけなのだろうか。先生のことを観察しながら俺は話を続けた。

「私、捕まえようとしたんですけど、あとちょっとで手が届かなく

て……（涙）

「そうだったのか。遠藤さん、それは辛かったね。君と井上君はとも仲がよいように見えていたし」

（誰！？ しかも嘘つき！ いつもあんな感じで“私”って言うてくれてたらしいのに……）

樹が何か失礼なことを考えているような気がしたので先生に気づかれないように思い切り睨みつけてやった。これぞ幼馴染の勘ってやつか？

先生に視線を戻すと、先生は普段は絶対に出不さないケータイを出してどこかに電話をかけていた。たぶん救急車を呼んでいるのだろう。しばらくして話がすんだのか、俺のほうへと向き直った。

「多分これからいろいろと聞かれると思うけど大丈夫かな。辛いと思うけど、井上君のためにも頑張ってくれないか」

「はい。私に出来ることは頑張ります」

ここできらりと女の子のスマイル。後ろで樹が「おお」とか言ってる。失礼な奴め。俺だって相手が目上の人だったら丁寧な言葉遣いとか女の子らしい態度とか出来るわい。

「とりあえず、職員室まで来てもらえるかな。午後の授業は休んでもいいけど、どうする？」

「今はあんまり出たくないです……」

「そうか。じゃあ行こう」

先生の後ろについていく。何故か樹も付いてきた。こっそり睨みつけると、樹が何食わぬ顔で俺に近づき、耳元で囁いた。

「（俺のおかげでサボれてよかったな）」

この時樹に触れないことに気がついたのは言うまでもない。

ゆーれい。(後書き)

遙ちゃんは女の子です。気づいてた人もいると思いますが。次はやつと舞台が学校へと移ります。

かぞく。
(前書き)

今回は樹が可哀想なことになっています。

かぞく。

「おーい、遙ちゃん？」

意識を前に戻すといつの間にか樹が俺の目の前に移動していた。

「樹近い……（この変態め）」

俺が樹から離れながら言うと、少し傷ついた顔をした樹が反論してきた。俺の心の声があったわけでもあるまいに。

「だって遙ちゃん、僕がいくら声かけても反応してくれないんだもん」

「だからって、近づくな！ お前が近寄るとなんだか寒いんだよ！」

樹が頬を膨らませてやっと離れた。こんな幼稚園児みたいな事をするところは変わってない。つかなんてそんなところで拗ねるんだ。

「僕が近づくとそんなに寒い？ それとも近づかれるのがそんなに嫌？」

「だからほんとに寒いんだよ。……分かったからそんな泣きそうな顔すんなよ。俺よりでかいくせに」

そうなのだ。樹は俺と並ぶと俺より10cmくらい高い。俺も157、8cmくらいはあるから、クラスでもわりと高いほうだろう。それなのにどうしてこんな性格になっちゃったんだか……。ぶっちゃけこのサイズが泣きそうな顔してると……

「（……キモイ）」

「遙ちゃん……」

あ、口から出たか？ 激しく樹が落ち込んでいるが、まあいいか。部屋の隅で丸くなってる樹は無視して俺は一人考え事を始めた。

「しかし何で樹はこんなモノになっちゃったんだ？」

「んー、それはね、僕もよく分かんない」

急に樹が復活した。つくづくよく分からないやつだ。しかし、樹まで原因が分からないとしたら一体どうしたらいいんだ？ もし、樹がこのまま成仏しなかったら俺は一生付きまとわれることになるのか？

「……嫌すぎる」

「遙ちゃん……、一応何かと聞いてもいいかな」

「え、そりゃ勿論お前に付きまとわれるのが嫌に決まってんだろ」

また樹が部屋の隅で丸まっている。そんなに落ち込むんだったらここになきやいいのに。馬鹿な奴だ。

「ところで樹、お前自分の家には行ってみたのか」

「……行ってない」

「行って来い」

俺の有無を言わせない声に樹が泣きながら部屋を飛び出していった。へー、ユーレイでも涙出せるんだ。つか今あいつ壁通り抜けて行かなかったか！？ これからどうやって気をつければいいんだよ……。

「行ってきた！！」

「もう！？ まだ30秒くらいしか経ってないよ！？」

樹の家は俺の家からだいたい5分くらい歩いたところにある。確かに近い。でも30秒で行ける距離ではない。

「お前、どうやって行ってきたんだよ……」

「んー、直線で？」

「（なぜに疑問形！？）で、誰かお前に気づいた人いた？」

「兄さんが気づいた、と思う。声はかけてはこなかったけど、俺のことじっと見てたし」

「浩紀ひろきさんか。で、話しかけてみた？」

「声をかけようと思ったら、目そらされた」

「……………」

俺はそつと樹から目をそらした。

かぞく。
(後書き)

ごめんなさい。まだ学校へ行ってません。次回は行きます。コメント等いただけると嬉しいです。

こうはい。**(前書き)**

やっと二人は学校へ行きました。この不良学生めっ

こうはい。

そんなこんなで次の日、俺は自分のクラス、2年3組にいた。

「お前、学校にまで付いてくるのかよ」

「だって、遥ちゃんいないと僕暇だし。ついてきちゃだめだったかな」

「ダメに決まってるだろ！ だいたい、他の奴らに見えないんだから俺がお前としゃべると俺が変な人に思われる！」

そこまで言い切って俺は慌てて自分の口を押さえる。恐る恐る周りを見渡すと、俺を変人でも見るような目で見えるクラス一同。まだ朝早くて教室にいる人数が少ないのがせめてもの救いか。……睨むよりも愛想笑いたしたほうが変な噂になりにくいかな？ なんてことを考えながら一応笑ってみる。自分でも顔が引きつっているのが分かる。くそっ、これも全部樹のせいだ。

「……今のは遥ちゃんが悪いんだからね」

「（お前は俺の授業が終わるまでどっか違うところ行ってるよ。自分のクラスとか）」

一応反省して今度は小声で言ってみる。後から気がついたんだが、一人でこそこそ独り言言ってるほうが怪しい。

「だってな。自分の教室行って花とか飾ってあったら虚しいし。僕は遥ちゃんというほうがいい」

「（駄々こねても駄目なものはダメ。さっさとどっか行け）」

ぶっ、とか気色の悪いことを言いながらやっと樹が教室を出て行

った。律儀に開いたドアから。別にそのまま壁通り抜けて行ってもいいのに。そんなことを考えながら樹が出て行ったドアを見ていると、ふと影が差した。

「今の、三年の井上樹先輩だよな」

「え!？ あいつのこと、見えんの?」

目の前に立っていたのは、確か同じクラスの……、

にしじまたくや
「西島拓也君だっけ」

「そう。覚えてくれてたんだ。俺、井上先輩の後輩なんだ」

道理で樹のことを知ってるわけだ。あいつは身長も高いし、何気に運動神経もいい。というわけでバスケット部に入っていた。そこそこ強かったらしい。樹がバスケットやってるとこ一回も見ることがないが。

「俺、井上先輩が亡くなったって聞いてすっげえショック受けてさ。でもあれ、井上先輩だよな」

「んー、まあ、そうだね。ユーレイだけど」

「井上先輩と遠藤さんって、どういう関係なの？ 井上先輩があんなにべったりくっついてるなんて」

「幼馴染。家近いんだ。それだけ。つかやっぱりあれってべったり憑いてんだ」

俺が真剣にどうやって樹を離そうかと考えていると、西島君が身を乗り出して話し始めた。近いから（怒）。

「俺、井上先輩のこと尊敬してるし、先輩には早く成仏してほしんだだけ」

「別に俺は樹のこと尊敬もしてないし好きでもないけど、早く成仏してほしいな」

俺が樹のことを尊敬してないということを聞いて、若干信じられないという顔をした西島君が何かを言おうと口を開いたが、思いとどまったのか何も言わなかった。男のくせに、言いたいことぐらいはつきり言え。まったく。

「まあ、とにかく井上先輩が成仏する方法、探そうぜ」

「そうだな。困るのは俺だし。で、何か考えがあるのか？」

「べたかもしんないけどさ、普通ユーレイがこの世に残るのってさ、何か未練があるからじゃないのか」

「なるほど。けどあいつにこの世に残るほどの未練があるとは思えねーんだが」

あいつがこの世に残るほどの未練。何か思い当ることがないか、樹が落ちた時から順に記憶を遡ってみる。

「あ……」

「何か思いついたのか！」

「……プリン」

「……………」

あいつんちに行った時、樹のお母さんが出してくれたプリン、あいつのお気に入りだったんだよな。しかもあいつが一つだけ大事に残しといたやつ。

「まだ怒ってんのかな」

こうはい。(後書き)

次回は井上先輩と西島君の感動の再会(予定)です。

そして少しずつユーレイの謎が解けて行きます。樹君にはまだもう少し成仏してほしくないですね。作者的には。物語が終わってしまいますから。

ごきげん。(前書き)

今回は遙ちゃんが天然気味です。そして樹がとても機嫌がいいです。そしてこの物語は1時間クオリティとなっております。時間がなかったんです！

いぎげん。

「終わった〜！」

6時間目終了の鐘が鳴るとどうしてもこう言ってしまう。まあ、この気持ちは全国共通だろう。開放感を感じないはずがない。

「さて、授業も終わったことだし、俺は少し図書室に行ってくる。

どうせ今日は部活も休みだし。遠藤さんは井上先輩を探してこいよ」

「図書室？ 何しに行くんだ？」

「ちよっと調べ物」

それだけ言うと、西島君は俺にひらひらと手を振りながら教室を出て行った。調べ物って、何だ？

「ま、気にしても仕方がないか。それにしても樹はどこに行ったんだ？」

俺はとりあえず校舎内をぶらぶらと歩いてみることにした。公立校だからそうたいして大きいわけでもないし、すぐに見つかるだろう。

「にしても、だる〜。何で俺が樹探して校舎歩かなきゃなんねえんだよ」

「悪かったね〜、僕がいろんなところに行って」
「!?!」

背中に寒気が一気に走る。漫画ならたぶん髪の毛が逆立ってるところだろう。悲鳴を上げるのは何とか堪えた。

「(樹!?) いきなり背後から声かけんなよ! それと近づきすぎるな。寒気がする)」

「遙ちゃんは何でそう僕に冷たいのかな……。昔はあんなに樹君、樹君って……」

「言ってない。とりあえず場所変えるぞ。ここだと俺が変な眼で見られる」

それだけ言って俺はさっさと屋上へ通じる階段を目指して歩き始める。見なくても樹が付いてくるのは分かっているので、一切後ろは見えない。

「そういえばさ、お前のこと他に見える奴いたぞ」

「ん? 誰?」

「西島拓也。俺のクラスメイトでお前の後輩。知ってるだろ」

「ああ。拓也君ね」

樹が一人腕を組んでなるほどねー、とか一人でうなずいている。何かなるほど、なんだ? その時、後ろから足音が近づいてきた。振り向くと西島君がこちらに向かってくるところだった。

「いたいた。屋上に行くの?」

「あ、うん。他に人がいたらこいつと普通に話せないだろ。それより、調べ物は終わったのか?」

「うん。おかげさまで。ちょっとすごいもの見つけた。詳しくは屋上で」

意外と重い屋上の扉を押しあげると、ぽかぽかと暖かい春の日差しが俺たちに降り注いだ。さっそく樹がわーいと言いながら飛び出していった。あいつは餓鬼か。

「ちょっとこれ見てくれる？」

屋上の真ん中らへんに西島君と向かい合って座ると、一枚の紙を差し出してきた。何かの本のコピーらしい。一番上に、『幽霊は本当にいるのか!？』とかいう見出しが付いているのが気になるが。

「……これって信用できるのか？」

「でも、ここ見て」

西島君が紙の真ん中らへんを指差す。そこには幽霊はなぜ生まれるのか、ということについてのいろいろな説が書いてあった。

「ユーレイがなぜ生まれるのか、か。一番有力な説はやっぱり朝西島君が言ってたみたいに、強い未練があるからっていうのらしいね」
「やっぱり井上先輩に聞いてみるのが一番早いんじゃないの？ 先輩の未練は何ですか？ って」

二人揃って樹のほうを見る。そこにはまるで水泳でもするように空中でジタバタしてる樹がいた。俺たちの視線に気がつく、樹は俺たちに手を振ってきた。両手で。

「!？」

異様な気配を感じて向かいの西島君に視線を戻すと、よっぽど樹に手を振ってもらったことに感激したのか、目をうるませて井上先輩が俺なんか手を振ってくれるなんて！ とか言ってる。こいつと協力しようと思ったのは間違いだったか。

俺が二人に軽蔑とあきれの視線を送っていると、樹が西島君にふわふわと近づいて行き、俺に背を向けて何かこそそと耳元で囁き始めた。樹が囁く時間に比例して西島君の顔から血の気が失せて行く。まだ春だから熱中症ってわけではないと思うから、貧血か？

「分かった？ 拓也君？」

最後に樹がそう締めると、西島君が首が飛んでいってしまいそうな勢いで頭を縦に振りまくった。顔色は真っ青なままだ。

「おい、西島君、大丈夫か？」

俺が心配して声をかけると、失礼にも奴は俺からすごい勢いで大丈夫です、とか言いながら離れた。そのまま屋上の端までさがっていく。

「お前、西島君になんて言ったんだよ。めっちゃおびえてんじゃない」「ん、別に何も♪」

今日の樹はなんだかとても機嫌が良かった。俺にはさっぱり分かんらん。

ごきげん。(後書き)

男心を理解できない遥ちゃんでした。そういうことってありますよね。次回は樹の未練について遥ちゃんが突っ込みます。

おにいちゃん。(前書き)

今回は樹に天罰が下ります。そして樹が可哀想な回再びです。お
兄ちゃんはやっぱり最強ですね。

おにいちちゃん。

帰り道、俺は隣をふわふわと浮かびながらついてくる樹にあることを聞いてみようと思った。

「なあ、樹。お前今日西島になんて言ったんだ？」

「別に♪ ただちよつとだけ注意してあげただけだよ」

「注意？ 何を？」

「交友関係について、かな」

それだけであんなに真っ青になるはずはないのだが。ま、俺が1日でこいつは呼び捨てで十分だと思うほどのやつだからそんなに気にすることもないか。

「なあ、樹」

「ん？」

「お前は今日西島が話してたやつ、どう思う？」

「話してたやつって、僕の未練がどうのってやつ？」

「そ。お前、なんか未練でもあんの？」

俺の言葉に樹が腕を組んで唸りながら真剣に考えている。しばらくして樹は眉間にしわを寄せたまま口を開いた。

「強いて言うなら、遥ちゃんが女の子らしくならないことかな」

俺は反射的に樹に蹴りを入れるが、それは樹の体を通り抜けてしまふ。

「やだ、遥ちゃん。何、サービス？」

「んな訳あるか！」

もう一発蹴りを入れそうになるがぐっと我慢する。くそ、触れられないことがこんなに苦痛になるなんて。今までなら触れられることが苦痛だったのに。

「……今遙ちゃんなんかすごく失礼なこと考えなかった？」
「気のせいだ」

こいつといるとなんだかいらいらするのでさっさと歩く足を速める。家に帰っても余り状況は変わらないが、今よりはましだろう。
……ん、家？

「なあ、これから樹んち行かねえ？」
「僕んち？」

「そう。浩紀さんに会いに行ってみよう。もしかしたら未練についてなんか分かるかも」

「えー、兄さんに会うの？」

まあ、確かに浩紀さんは性格がちょっと、というかかなり悪いが、浩紀さんがひどいのはお前にだけだし。俺には優しいし」

樹がまたひどいつ、とか言いながら空中で丸まってしまったが知ったこっちゃない。俺が行くと決めたんだから行く。

「あ、嫌なら別にお前は来なくてもいいんだぞ」
「行く」

あ、そこは即答なんだ。樹の同意も得られたことだし、さっそく俺は樹の家へと向かった。途中自分の家によってお土産に浩紀さんが好きなクッキーを持っていく。ああ見えてもあの人甘党なんだよ

な。

「こんにちは。お久しぶりです。遥です」

「あー、遥ちゃんか。久しぶり。うちの馬鹿弟連れてきてくれたの？」

……やっぱり気づいてたんだ。浩紀さんと樹は外見が結構似ている兄弟で、樹が背が高いのだからもちろん浩紀さんも背が高い。私と並ぶともう頭一つ分くらい身長差がある。唯一違うのは浩紀さんが眼鏡をかけているところか？

「あの、浩紀さんはこれが見えるんですか？ ついでに声も」

「うん。見たくもないし、聞きたくもないけどね」

相変わらず樹には超厳しい浩紀さん☆ というかもうこれはいじめだろう。ま、俺も普段いじめているから人のことは言えないが。樹はよっぽど兄に会うのが嫌だったのか、さっきからずっと俺の後ろで体を縮めている。俺よりもでかいんだから隠れきれぬわけがないのに。

「いつまで遥ちゃんの後ろの隠れてるんだ、樹。男のくせに情けねえな」

「誰のせいだ！ このくそ兄貴！」

「……、ほう。いい度胸だ。実の兄に向って『くそ兄貴』だど？」

「—————！！」

樹が声にならない悲鳴を上げた。確かに俺が言われたわけじゃないのに俺が鳥肌が立つくらいだから、それを真正面から受けたら……溶けるんじゃないのか？ 相変わらずすごい人だ。

俺が変なところで感心しながら兄弟のやり取りを眺めていると、

ふと浩紀さんがこっちを見た。

「ま、せっかく来たんだし、上がって行きなよ、遙ちゃん。……樹、お前は……分かってるな？」

「――――！？」

樹はもう大泣き状態だ。なんか浩紀さんならユーレイでももう一度殺せるような気がする。そのことを浩紀さんに聞いてみると、

「ん？ まあ、できるんじゃない？」

という何とも軽い答えが返ってきた。

おにいちちゃん。 (後書き)

次回はお兄ちゃんが生き生きとします。もはや樹をいじめるのが生きがいです。でもちゃんと弟のことは大事に思っ……いるはずです。素直じゃないんです。たぶん。

くろいほん。(前書き)

お兄ちゃんは怪しい物がとっても似合うようです。いったいどこから見つけてくるんでしょうね？

くろいほん。

結局浩紀さんからは何も分からなかった。というのも、浩紀さんが樹いじめに徹してしまつて話にならなかったからだ。

「まだ昨日のこと引きずってんのかよ。いい加減うざい……」
「だって！」

今日も樹は学校まで俺に付きまとつた。しかもウジウジといじけまくってる。樹をここまで追い込める浩紀さんもすごいけど、そのとぼっちりを受けるのは俺だ。何としてでもやめてもらわねば。

「……浩紀さんに樹をいじめるなつて言ってみるか。無駄だと思うけど」

「遥ちゃん！ 僕のことそんなに……！」

一人何か勘違いしているような気もするがまあ、ウジウジしなくなったからいいとするか。ほっとけ。……それにしてもさっきから西島の視線が気になる。昨日あんなに気軽すぎるほど話しかけてきた奴と同一人物とは思えん。あ、目があった。……？ どうしたんだ？ 西島の奴、急に顔が真っ青になって目をそらしやがった。

「昨日からあいつどうしたんだ？ 急に目そらしたり、失礼な奴だよな」

なあ、樹、と言って振り返ると、さっきまでウジウジしてた奴は誰なんだ！？ というくらい上機嫌な顔をした樹がいた。

「お前、何でそんなに機嫌いいの？」

「うーん、兄さんの気持ちが分かったからかな」

意味分かんね。浩紀さんの気持ちが簡単に分かるわけがない。つか、浩紀さんの気持ちって……、

「お前、西島をいじめてるのか……？」

「え、そんなするわけないだろ？ 兄さんじゃあるまいし」

「兄さんの気持ちが分かったような気がする、って言ってたのはどこのどいつだよ」

「えー、誰だろお♪」

ムカツ！

「……俺、嘘ついたり誤魔化したりする奴が一番嫌い」

「ごめんなさい！！」

やぱり素直が一番だ♪ しかし相変わらず樹も分かりやすい奴だな。まあ、何でこれが一番効くのかは未だによく分からないが。浩紀さんに教えてもらったときから使わせてもらっている。

「まあ、いっか。あいつのことはほっといて、今日どうする？ また浩紀さんのところ行ってみるか？」

樹が全力で首を横に振った。まあ、そうなくても仕方がないようなことが昨日はあった。

————それは昨日の放課後、樹宅にて起こった。
「遙ちゃん、これ見て」

「なんですか、これ。何かすっげー怪しい本ですね」

「実はね、昨日樹がのこのことこの家に入りこんだだろう？ それでその日のうちに取り寄せた」

浩紀さんの目が輝いている。これは結構危険なサインだったりする。主に樹にとって。案の定樹が微妙に浩紀さんから距離をとりながら質問した。

「で、そ、それは一体何なんでしょうか？」

情けないことに声が少々裏返っている。無理もないか。目を輝かせた浩紀さんは俺には害が及ばないと分かっているにしろ恐ろしい。

「これはね、フフ、見てみるかい？」

「「遠慮します！！」」

珍しく声がはもった。その本は黒い装丁で、表紙にはかすれていて読みづらいが、悪霊徐霊術とか何とか書いてある。貴方の弟は悪霊ですか！？ 樹は何も見なかったことにしたらしい。

「僕結構こういうものにも興味あってね。ちょうど弟がいい感じになったから試してみようかと」

弟実験台！？ でも浩紀さん、その本似合います。浩紀さんは本を抱えて立ち上がると、真黒い微笑みを樹に向けて言った。

「さて、付き合ってもらおうよ。樹♪」

「嫌だー！ー！」

泣き叫ぶ樹。それを無視して樹を引きずっていく目を輝かせた浩

紀さん。……あれ、樹って触れないんじゃないか？ 目を輝かせたところは子供みたいで可愛いんだけどなあ。絶対巻き込まれない。

「あ、遙ちゃんは適当に寛いでて。すぐ終わるから」

そう言って樹を引きずった浩紀さんは家の奥へと消えて行った。その後樹の悲鳴が家じゅうに響き渡り、浩紀さんの笑い声もまた響き渡ったのは言うまでもない。ぐったりして帰ってきた樹曰く、

「もう二度と家には帰らない……」

いったい何があったんだ？

くろいほん。(後書き)

次回はちゃんと話が進むはずですよ。樹の未練って何なんですか。

**みれん。
(前書き)**

樹君の未練がとうとう発覚します。そして西島君の影がどんどん薄くなります。お兄ちゃんは今も変わらずの存在感です。

みれん。

「それよりもさ、樹って真面目に何か未練でもあるのか？」

「そんなこと言われてもね、心当たりが無いものは……あ」

「何かあるのか！」

「あるとしたらあれしかない」

樹が腕を組んで唸りながら言った。相当深刻な未練に違いない。

「遙ちゃんが女の子らしく……冗談です嘘ですごめんなさい！！」

俺の一睨みで樹は空中土下座を披露してくれた。器用な奴だ。しかし、女の子らしくか。確かに樹は死ぬ前から俺にしつこいほど女の子らしくするように言ってたな。俺が女の子らしくなんて……考えただけで寒気がする。

「なあ、樹。俺がホントに女の子らしくすれば成仏できんのか？」

「え、何、女の子らしくしてくれるの！？」

樹の顔が花でも咲いたようにパツと明るくなった。

「何だよ、その嬉しそうな顔は。今の俺がそんなに嫌いなのか？」

「いや、別にそういうわけじゃないけど、遙ちゃんがそう言うてくれるのが嬉しくて」

言うだけでこんなに嬉しそうにするなんて……なんか複雑だ。

「……お前は俺の父親かよ。ま、でも試しにやってみるか」

「ホントに！？……ああ、僕今すぐにも成仏できそう」

「しろ。今すぐにしろ」

「ひどい!!」

口ではそう言っておきながら樹の顔は笑っていた。俺もちょっと嬉しくなった。これくらいで喜んでくれるなら、試しにやってやるのもいいかもしれない。

「よし、やってやろーじゃねーか! で、どうすればいいんだ?」

「いや、その時点でもう女の子じゃないから。そうだな、まず自分のことは私って言うてごらん」

「私? ……なんか変な感じする」

俺は物心ついたころにはもう自分のことは俺といていた。それをいまさら変えるなんて、結構無理があるような気がする。でも、樹を成仏させるためだ!

「……私、頑張る」

「!?!」

樹が鼻を押さえて俺……じゃなかった。私に背を向けた。視線を感じて振り向いてみると、そこには同様に慌てて鼻を押さえて私に背を向ける西島がいた。何なんだ、こいつら。

「? 樹? どうしたんだ?」

「いや、何でもない。大丈夫。グッジョブ!」

親指を立てて樹が力強く言った。何がグッジョブなんだ? まあ、樹がだいじょうぶって言うてんだからいいか。

「次は、そうだな、僕のことは“樹君”って呼んで。後は、クラス

の女の子の話し方聞いて同じように話してみればいいんじゃないかな」

「うん、分かった。では早速。……樹君」

樹がまた鼻を押さえて私に背を向けた。異様な気配を感じて振り向くと、鼻を押さえた手から本当に鼻血が流れ出ている西島がいた。……何あいつ。気持ち悪。変な奴だな。

「……この天然め」

「？ 何、樹君。何か問題でもあんのか？」

まだ鼻を押さえたまま樹がぼそつと言った。ついでに、何なのこの子のギャップは、とかわけの分からないことを言っている。

「まったく、男子はよく分からん種族だな。まあいいや。樹……じやなくて樹君、この後はどうすればいいんだ？」

「言葉遣いの後は、その乱暴な振る舞いが何とかならないかな」

「……努力する」

私はもともと喧嘩上等、かかってこれるならかかってこい！ というタイプなので、生傷が絶えたことはないし、樹君のことも何度巻き込んだか分からない。おかげで私も樹君も腕つぶしだけは強い。さすがに中学に上がってからは減ったけど、その振る舞いは未だに残っている。ちなみに威嚇の仕方も喧嘩をしているところに浩紀さんから教わった。

「よし、というわけで、『遙ちゃん女の子作戦』開始だ！」

「おー」

私はあまり気乗りしない返事を返した。

みれん。(後書き)

次回から遙ちゃんの女の子作戦が始まります。そろそろ終わりに
近づく……のかな？

しばらくして。 (前書き)

今回から書き方を他の作家さん方を参考に変わってみました。前よりは少し読みやすくなったのでは……と思っていたですね。

ああ、文才が欲しい。

しばらくして。

樹君がユーレイ化してから早くも一カ月がたった。

昔はあんなに荒っぽかった私も今では、

「樹君、今日は学校へ行かないんですか？ 遅刻しますよ」

「いや、行くよ。行くけどね、遙ちゃん、キャラ変わりすぎ……」

こんな言葉遣いが板についてしまった。

自分からこうなれと言いながらちよつと落ち込んでいる樹君は放って置いて、私はこの言葉遣いを叩き込んでくれたクラスの女の子たちを思い出していた。

———3週間前。

「え！？ 遠藤さんが女の子らしい言葉づかいを覚えたい!？」

「これは一大事よ！ きつとあの遠藤さんに好きな人でもできたに違いないわ!」

「みんな、心して叩き込むわよ」

以上にテンションが高い女子の皆さんには正直引いたけど、今では感謝だ。本当に一カ月でよくここまで直してくれたと思う。

「……前は僕が朝起こしてたんだけどな。言葉遣いひとつでこんなに変るもんなんだ」

樹君が何やら遠い目をしているが、そんなことはお構いなし。未だに男心というものだけは理解できない。

「早く行かないと本当に遅刻しますよ。私、置いていきますから！」

あ、ツンツンしてるところは変わらないんだ、と訳の分からないことをつぶやいて復活した樹君のことは本気でスルーして玄関をとびだす。今回は少し走らないと本当に走らないと遅刻してしまうかもしれない。

「樹君、私、少し本気で走りますけど、大丈夫ですよ？」

それだけ言って返事も聞かずに走りだす。まあ、樹君はユーレイだし、本気で走ろう（飛ぼう？）と思ったら私よりも速いだろう。

「……フウ、さすがにちよつと疲れたわね」

「は、遙ちゃん、速すぎ……」

ユーレイなのに樹君が軽く息を乱している。ユーレイでも走れば息が上がって疲れも感じるのだろうか。

……まあ、浩紀さんが樹君にあんなこと出来たんだから、疲れも感じて当然か。

「とりあえず、私は先に教室に入ります。樹君はそのみっともなく乱れた息を整えてから来てください」

遙ちゃんヒドイっ、とか言いながら空中で丸くなった樹君を軽く無視して昇降口へと向かう。結構ギリギリの時間なので、周りにいる人は少ない。

その数少ない人たちに愛想笑いをふりまきながら、私は自分のクラスへと向かった。

……そういえば最近、やけに男子から熱い視線を感じるのは気の

せいか？

教室に入って一番に話しかけてきたのは、西島君だった。

こいつは主に私と樹君が別々に教室に入ってきたときに私に話しかける。

「遠藤さん、おはよう。今日井上先輩は？」

「まだ外だ。それにしても何で樹君が俺のそばにいないときだけ俺に話しかけるんだ？」

「俺が相手の時は前に戻るんだ！？ ……いや、だって井上先輩がいたら」

「僕がいたら何だって？」

「！？」

いつの間にか樹君が西島の後ろにいた。私は樹君が近づいてきたのが見えていたけど、なんか面白そうだから黙ってた。

西島が樹君を前にわたわたと慌てているのを横目に、私は自分の席に着いた。もうそろそろ担任が来るころだろう。

荷物を一通り片付けて、樹君がいるほうへ視線をやる。終始にっこり笑っている樹君に対し、西島は可哀想なほど冷や汗をかいているのが分かる。

面白いので、先生が来るまでの間、しばらく観察することにした。

しばらくして、樹君が私の視線に気がついたのか、振り向いて…一瞬消えた。

と思ったらそこには機嫌よく笑う樹君がいた。

西島は何も気がつかなかったようだし、目の錯覚か？

それから数分後、いつもよりちょっと遅めの時間に担任が入ってきた。

走らなかつたじゃん!!

あのひとおなじそら。(前書き)

サブタイトルは”あの日と同じ空。”です。分かりにくくてごめんなさい。

あのひとおなじそら。

—————キンコンカンコン

どこか遠くで鳴るチャイムの音で、

「遠藤さん、終わりましたから早く起きてくださいね。そんなに私の授業は退屈でしたか？」

目が覚めた私の前に、こめかみに青筋を浮かべた先生が立っていた。いくら言葉遣いが綺麗になったからといって、午後最後の授業を全部起きて受けられるようになっていいるわけがない。

……まあ、前は一日中お昼寝だったからましにはなっていると思うけどね。

「明日は一番で当てますからね。ちゃんと予習してきてください」

ハハハ、先生、顔は笑っているのに目が笑っていません……。

確かに悪いのは私だけど、次からはちゃんと受けるから。……分かったからその目で私を見ないで！！

「災難だったな、遠藤さん。今日は俺も寝てたのになー」

先生が教室から出ていった後、西島が話しかけてきた。あれ？

西島は樹君が居るときは私に話しかけてこないんじゃないかなかったっけ？

「井上先輩なら今日はいないよ。いつもならこの時間いるのにな」

私ができろきよろしているのに気がついたのか、西島が言ってきた。

「……先に屋上行ったのかな？　じゃ、俺も屋上行ってみるわ」
「……相変わらず俺の前では素のままなのな」

西島が何か激しく凹んでいるけど、ま、無視。

教室を出て階段を一番上まで上りきる。その先にある少々重たげなドアの先が屋上だ。樹君がユーレイ化してからすっかり屋上に行く習慣ができてしまった。校内で人が少ない場所ってなかなか無いからね。

「樹君、もう来てますか？」

声をかけながらドアを開ける。けど目の前には誰もいなかった。屋上の真ん中あたりに立って、辺りをぐるっと見回す。……ちょうど来た西島と目があった。

「……ツチ」

「今舌打ちしたよね！？　何、僕何か気に触るようなことした！？」

「はい。あなたの存在自体が気に触ります☆」

「何でそんなときだけ敬語！？」

西島が屋上の隅で丸くなった。……つまんないの。樹君からかったほうが面白いや。樹君早く来ないかな。

屋上の真ん中でごろんと仰向けに寝っ転がって空を眺める。もうすぐ梅雨に入るこの時期には珍しく綺麗な青空で、風も優しくかった。

「あー、こんなところにいたの、遙ちゃん。探したよ」

「樹君、もう屋上に来てるのかと思って先に一人で来たんですけど。誰もいなくてびっくりしました」

しばらくすると樹君がやってきて、私の顔を上から覗き込みながら言った。西島の存在は無視することにしたらしい。後輩なのに。

樹君越しに空がはっきりと見える。この人、もうユーレイなんだよな。樹君も私が樹君越しに見ているものに気がついたらしく、空を見上げた。眩しそうに空を見上げながら、しみじみと口を開いた。

「そういえば、僕が落ちたのもこんな空がきれいな日だったな。もう一カ月も前になるのか」

「樹君？」

また、また樹君の体がまるで空気に解けるように消えかけた。私が声をかけると、元通りに戻って私に笑いかけながら言った。

「どうしたの？ 遙ちゃん」

「樹君、私が女の子っぽくなったらホントになくなっちゃうのかな……」

「遙ちゃん、それって……」

樹君に突っ込まれて私は自分が何を言ったのか気がついた。これじゃまるで樹君にいつまでもいてほしいって思ってるみたいじゃない！！ 私には樹君を成仏させるために女の子っぽい言葉遣いに直したのに！

「あ、わ、い、今の無し！！」

「そんな、全力で否定しなくてもいいのに」

樹君が私の背後に回って後ろから抱き締めるみたいな格好になった。私の耳元に顔を寄せると、内緒話をするみたいに小さい声で話しかけてきた。

「そんなに僕と離れるのが寂しい？」

「う、うわ！ 何言ってるの！？ そんなわけないじゃない！ 樹君最近浩紀さんに似てきましたよ！？」

「え、兄貴に！？ やべ、自重しなきゃ」

あ、そこはちゃんと反応するんだ。いつもどおりにの樹君に戻って安堵する。うん。色も性格も元通りだ。

「ほら、樹君、今日はどれ試してみますか？ これ、浩紀さんが護身用につけてくれたんです」

私がとりだしたのは、いつかの（樹君にとっては悪夢の）本だ。

「いや、待って遙ちゃん。それはまずい。ホントに、いやマジでやばいから！ 頼むから近づかないでー！！」

真っ青になった樹君がものすごい勢いで私から離れていく。なるほど、これは確かに護身用に便利だ。

「おーい、俺の存在は無視ですかー？」

どこから誰かの声が聞こえてきたような気がするが、気のせいだろう。久々に樹君と遊んでやろうと思い、私は（本を片手に）樹君を追って走りだした。

……それから私の体力が尽きるまで延々と鬼ごっこが続いたことは言うまでもない。

「……おーい、ホントに俺の存在忘れちゃったの？」

あのひとおなじそら。(後書き)

本編そろそろ終了です。……あと2、3話くらいかな？ でもあいつら勝手に動き出すからな……。もうちょつと長くなるかもしれないです。

本編終了し次第、こちらも番外編を書いていく予定です。リクエストある方はお気軽にどうぞ♪

なみだ。 (前書き)

今回、思いっきりシリアル……じゃなくて、シリアスです。
お兄ちゃんの過去が少しだけ登場します。

今回は若干登場人物が全員キャラ崩壊します。ご注意ください。

……本文が重すぎてここでもしかボケられない。

なみだ。

放課後、教室に差し込む夕日で室内がオレンジ色に染められるころ、私は一人図書室にいた。

樹君を西島に押し付けてきたので、本当に一人だ。

「なんか面白そうな本ないかな……」

樹君がユーレイ化してからストレス発散とばかりに本を読みふけるようになった。

私に言葉遣いを叩き込んでくれた女の子たちには本当に驚かれたものだ。いくら言葉遣い（行動も）が荒っぽいからといって読書はもともと嫌いではない。

放課後の誰もいない図書室を本棚に沿ってゆっくりと歩く。背表紙に視線を走らせ、時々立ち止まっては気になった本を手にとってぱらぱらとめくってみる。

「あれ、これなんだろう」

ふと目にとまった本を手取る。よく見ると、何年か前の卒業アルバムだった。

「おかしいな。何でこんなところに卒業アルバムがあるんだ？　この辺は物語だけのはずなんだけど」

とりあえず、元の場所に戻すため本を抱えたまま歩き出す。ああ、でも卒業アルバムの類が置いてあるところは一般の生徒立ち入り禁止だったっけ。

「どうしよう、これ」

脇に抱えている本に視線をやる。……あれ、この年って。

ふと思いついて閲覧室にある机の上で本を開いた。確か、3―2
だったはず……。

「あった……」

そのページには数年前の3―2の生徒たちの集合写真が載っていた。そして、右上の隅のほうに小さく丸で囲みである写真。……2
年前の浩紀さんのクラスだ。

「そういえば前、浩紀さんが卒業する直前に事故で亡くなった人が
居る、って聞いたことがあるな」

ちょっと気になるし、今日の帰りにでも浩紀さんのところによって
みようかな。

「こんにちは。浩紀さんいますか？」

その日の帰り道、嫌がる樹君を無理やり連れて浩紀さんのところ
へ寄って行った。樹君は私が一人で浩紀さんのところへ行くほうが
嫌らしいので、樹君の言葉を見殺しに行けば勝手についてくるんだ
けどね。

玄関から顔を出した浩紀さんに私は早速話を切り出した。卒業生
について。

すると、浩紀さんは珍しくちよつと困った顔をして部屋に上がるように言った。

「……で、遙ちゃんは偶然僕が卒業した年の卒業アルバムを見つけ、僕がクラスメイトに亡くなった人が居ると言っていたことを思い出したわけだ」

「そうです。ちよつと不謹慎ですけど、気になってしまいました」

「彼はちよつと複雑だね。簡単に話せることじゃないんだけど……」

またまた浩紀さんにしては珍しく、言葉を濁した。浩紀さんがここまで気を遣う人って、どんな人だったんだろう。

「彼はね、その……、落とされたんだよ」

「落とされたって、どういうことですか!？」

「実際には自殺ということになってるけどね。受験に疲れて自殺したと。でも落とされたことには違いない。本人がそう言ってたからね」

「本人が、言っていた？」

そこで浩紀さんが何かをこらえるような顔をして俯いた。いつもは煩い樹君も今は黙って浩紀さんの言葉を待っている。

「彼も、ユーレイになったんだよ。樹と同じようにね」

そう言った浩紀さんの眼には、薄く涙が浮かんでいた。

「そして彼は狂っていった。いわゆる悪霊と呼ばれるものになるのにそう時間はかからなかった」

「その人は、兄さんの大切な人だったんだね。大丈夫、僕は狂わないよ」

「当たり前だ。僕の弟だからな」

2人も大切な人を悪霊にしてたまるか、と呟いた声は、樹君にも聞こえていたのだろうか。

「あの、浩紀さん。……その、ユーレイになってしまったという方は？」

「ああ、彼ならもう成仏した……というよりも消えたと言うほうが正しいかな」

「消えた？」

「そう。最後だけはすごく穏やかな顔をしていたよ、彼は。散々迷惑かけていきやがってなあ」

最後に少しでも話を聞いて、私と樹君は私の家に帰ってきた。

私の部屋に入っても、二人とも口を開かなかった。

「……あのね、樹君。私、早く樹君に成仏して欲しいって言ってましたよね。でもね、いざ樹君とあと少ししかいられないって聞いたら、なんかね……」

そこまで言って、言葉が詰まった。つうつと頬に冷たい感触がした。樹君が悲しそうな顔をしているのを見て、ああ、私泣いているんだって気がついた。

樹君がユーレイ化してから一カ月と2週間。

残り2週間。

それが樹君に残された時間だった。

**なみだ。
(後書き)**

お兄ちゃんの過去については、今度詳しく短編に書こうと思っています。

おわりとはじまり。 (前書き)

キャラ崩壊パート2。

これにてこの物語は終了となります。この物語は。

おわりとはじまり。

「何か、あっという間でしたね」

「そうだね」

その日、私と樹君は二か月前と同じように並んで屋上の上に寝転んで空を見上げていた。

違うのは、私の髪が少し伸びたこと。そして、樹君が今にも消えてしまいそうなほど透き通っていること。

「あのさ、遙ちゃん。すーっごく今更だけど、言ってもいい？」

「何ですか？」

私は樹君の声で、隣に顔を向けた。樹君は自分から声をかけてきたくせに、空に視線を向けたままだ。

「あのね、僕、遙ちゃんのこと、大好きだったんだよ」

「……すっごく今更ですね」

私の言葉に苦笑する樹君。そして苦笑いを浮かべたまま私に顔を向けた。

「そうだね。でも、言いたかったんだ。楽しかったよ。ユーレイになる前も、なった後も。だからね、ありがとう、遙ちゃん」

「……………」

「遙ちゃん？」

私はふいっと顔を背けた。こんなの樹君らしくない。

「もう、最後までいい好きな子の笑った顔見ていきたいんだけどな」
「……じゃあ、行かなきゃいい」

自分が子供っぽいことを言っているのは分かっている。樹君が困った顔をしているであろうことも。でも、受け入れられないこともある。

「樹君はね、いつも私のそばにいるから樹君なんです」

「何だよ、その理屈。いつまでも僕が傍にいるわけじゃないだろ。いくら幼馴染とはいえ」

「でも、樹君ならずっと傍にいてくれます。困った奴だな、って苦笑しながら」

「まあ、だろうな。……そうだ、遥ちゃん、いいこと教えてあげようか」

樹君が上半身を起こして私を見下ろしながら言った。残り時間はもうない。

彼の姿がどんどん曖昧になっていく。もうほとんど微かにしか見えない手を私に伸ばして、樹君が最後の言葉を言った。

「大丈夫。僕は平気だよ。……遥ちゃんもね」

最後に一言加わったけど、あの日と同じ言葉。同じように遠ざかっていく姿。そこまで再現しなくてもいいのに。

私の笑顔は間に合ったのだろうか。

「遠藤さん……」

気をきかせて屋上の外で待っていた西島が近づいてきた。

「樹君はもう行ってしまいました。でも、まだここにいますよ」

西島が私が指差すところを見て笑った。

樹君はいつまでも、私の心の中に。

———「彼がユーレイになってちょうど二カ月後、今まで恐ろしい顔をして校内をうろついていたのが嘘みたいに穏やかな顔で僕に言ったんだ。『ありがとう』って。そして消えていった」

2週間前、彼のお兄さんはそう言っていた。ユーレイの姿は二カ月しかもたないらしい。

他のユーレイは知らないけど、彼のお兄さんの親友は狂った。でも彼は最後まで穏やかだった。

「その差は何だったんでしょうか？」

「それはたぶんね、そばにいる人の違いだよ。きっと」

僕はちよつと頼りなかったらしい、と言って彼のお兄さんは笑っていた。

樹君、傍にるのが私でよかったの？ 今となってはもう聞けないけど。

そしてもし聞いたら、樹君はちよつと怒った顔をして当たり前だと言うだろう。

その日、私は夢を見た。樹君と並んで座っている夢。

「遙ちゃん、僕から寂しがり屋の遙ちゃんへプレゼントだよ」
「誰が寂しがり屋だ！」

昔の言葉遣いが少し出てしまった……。でも、夢の中だからいいよね。

でもこれでも、前よりは丸くなったよね？

――――2年後。

「遠藤遙」

「はい」

私は隣の県の高校を受けた。あれから勉強も頑張ったから、そこそこの進学校に入れた。

浩紀さんに隣の県を受けるって言ったら、そうか、と一言だけ言った。樹君がもし生きてたらそこの高校に行きたいって言うってこと、知ってたのかな。

「…………井上陽平」

「はい」

「!？」

思わず声のしたほうに視線をやる。

そこには樹君よりもずっと小さい、でも気の強そうな男の子が居た。

「一緒なの、苗字だけじゃないですか……」

樹君が最後にくれた私へのプレゼント。
これからの3年間で、少しでも楽しみたい。

おわりとはじまり。(後書き)

気づいた方もいると思いますが、実はこの物語、私が個人的に書いていたものの番外編だったりします。

なので、元ネタのほうもそのうち上げようかな、とか思ったり思わなかったり。主人公違うんですけどね。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3196w/>

例えば、君が幽霊でも

2011年11月11日17時53分発行